

### 34. 当院の第1種装置における高気圧酸素治療の実際

鈴木卓二 樋口道雄 古山信明  
大塚博明

(千葉大学医学部手術部)

当院の高気圧酸素治療は、1974年1月に開始されたが、当初より約10年間の治療成績については、第18回の本学会で報告した。

今回、第2種高気圧酸素治療装置導入により、今後の治療は、本装置による方法が主体となるので、従来の第1種高気圧酸素治療装置の15年間の治療実績を、総合して報告する。

当院の第1種装置は、VICKERS社製、CHS型で、純酸素加圧下に、ほとんどの症例に対し10ポンド(約1.8ATA)から14ポンド(2.0ATA)、治療時間70~90分で治療した。

治療を行なった症例数は合計1246例で、延治療回数は13844回におよび、1症例当りの平均治療回数は11.1回であった。年齢をみると生後7日目より86歳で、平均38.6歳、性別は、男性742例(59.6%)、女性504例(40.4%)であった。

疾患別では、腸閉塞が535例と最も多く全体の42.9%を占め、年度別にみても、ほぼ平均的に半数を占め、小児の多いのが特徴的である。次いで突発性難聴の272例(21.8%)、末梢血液循環障害131例(10.5%)、脊椎、脊髄神経疾患72例(5.8%)、網膜中心動脈閉塞症43例(3.4%)となっている。また悪性腫瘍、腸狭窄、顔面神経麻痺、末梢神経障害、内分泌系疾患などにも積極的に試みている。

### 35. 脳血管障害に対する高気圧酸素療法の有用性

菊地康久\*<sup>1)</sup> 永山佳央\*<sup>2)</sup> 若松伸二\*<sup>2)</sup>  
高木康樹\*<sup>2)</sup> 後藤 厚\*<sup>2)</sup> 滝沢秀樹\*<sup>2)</sup>  
西川貴之\*<sup>2)</sup> 大隅 彰\*<sup>2)</sup>

{ \*<sup>1)</sup>東京医科大学霞ヶ浦病院高気圧酸素治療室  
\*<sup>2)</sup> 同 第二内科 }

脳血管障害に対する高気圧酸素療法(以下OHP)の有用性については、その判定基準が明らかでなく、未だ議論の多いところである。今回、我々は脳血管障害患者に対するOHPの効果、日常生活動作(以下ADL)、神経症状、自覚症状、精神症状の4項目について、OHP施行群と非施行群とで比較検討したので報告する。

【対象と方法】対象の平均年齢は、OHP施行群で66.9歳、非施行群で70.9歳であり、発症からOHP開始までの期間は、5~120日(平均33.5日)でOHPは、2ATA60分、一日一回、平均27.5回施行した。上記4項目をさらにADLでは食事、衣服、用便・尿、起座歩行、神経症状では運動神経障害、知覚神経障害、自律神経障害、自覚症状では頭痛、頭重、めまい、しびれ、耳鳴、精神症状では自発性障害、行動異常、知的精神機能障害、情緒障害、計16項目に分け、重・中・軽症別に改善度を比較検討した。

【結果】症状例では、精神症状、ADLはOHP施行群でより改善度が高く、ことに中・軽症例で、非施行群に比べ差が認められた。精神症状の中でも自発性障害、情緒障害の改善度が高かった。神経症状、自覚症状の改善度は、OHP施行群と非施行群とでは有意差は認められなかった。ADLの改善度がOHP非施行群に比べ施行群で高かったのは、自発性障害、情緒障害の改善が寄与していると考えられた。重症例については、精神症状、ADLでOHP施行群に軽度の改善を認めるものの、症例数が少なく、その有用性については今回判定は不可能と思われた。